

**第6回企画展「NOBORITO1945 - 登戸研究所70年前の
真実-」記録 企画記念第一回講演会 第一期：8月15
日までの登戸研究所 - 本土決戦準備と登戸研究所-**

著者	山田 朗
雑誌名	明治大学平和教育登戸研究所資料館館報
巻	2
ページ	101-119
発行年	2016-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10291/21335

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

企画展記念第一回講演会 第一期：8月15日までの登戸研究所 本土決戦準備と登戸研究所

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

従来11月から企画展をやっていましたが、今年は戦後70年にちなんで8月から企画展第一期を始めました。11月にさらに第二期の展示が始まります。11月以降も現在の第一期の展示はご覧いただくことができます。入れ替わりではなく展示が増えるという形になります。今日はこの第一期分のテーマ、8月15日までの登戸研究所についてお話をさせていただきます。11月からの第二期では8月15日以降、つまり、登戸研究所が解散し、その後、どうなったのかということをご皆さんに知っていただくという流れになっています。

今日は戦争中のお話です。「NOBORITO 1945」というメインタイトルがついています。1945（昭和20）年の登戸研究所。実はこの1945年というのは登戸研究所にとっては非常に大きな事件があった年です。もちろん戦争が終わったというのが最も大きな事件ですが、登戸研究所にとっては、まず一つは風船爆弾作戦がこの1945年の2月・3月辺りがピークです。登戸研究所から打ち上げているわけではないのですが、千葉県・茨城県・福島県に発射基地があって、2月・3月はひと月に2500発以上の風船爆弾が打ち上げられて、まさに風船爆弾作戦のピークでした。この風船爆弾というのは太平洋を横断する上空の偏西風が強い時期しか使えません。春から夏にかけては風船爆弾が使えず、兵器としては非常に制限があります。そこで登戸研究所では夏でも使える風船爆弾を開発しようとしていました。風船爆弾は通常、地上1万メートルくらいを飛んでいましたが、もっと高い1万5000メートルくらいまで気球をあげると、夏でも偏西風が吹いているので、そこに届くようなもっと大きな気球をつくって風船爆弾を打ち上げれば夏でもアメリカに到達することができるということがわかり、その研究と新しい風船爆弾の試作を行ないます。これはまた後でお話しします。

それから、登戸研究所にとって大きな事件の二つ目は登戸研究所が移転するということです。生田にあった登戸研究所のうち偽札関係部門を除き、電波兵器や風船爆弾の第一科、毒物・薬物・生物兵器・スパイ用品の第二科、それから量産工場であった第四科、これらのセクションが長野県の伊那地方を中心としたところに移転をします。大きな区切りは1945年の4月29日、

今は昭和の日ですが、当時は天長節＝天皇誕生日です。この4月29日を期して、研究所はここ〔現・生田キャンパス〕の本部が、登戸分室になり、本体は長野県、他は分散疎開します。これは空襲を恐れての疎開というよりは本土決戦準備のための移転です。本土決戦のためには松代に大本営を設置しようということで、工事を進めているわけです。この松代に近いところに登戸研究所、それからあとでお話ししますが、中野学校、これら秘密戦関係部門は長野県、群馬県の本土決戦の最後の抵抗の拠点と想定されたところに移転をしていきます。

登戸研究所にとって三つ目の大きな事件になりますが、移転してその後、登戸にあった時から少し編成が変わります。研究項目が、さしあたっての本土決戦に、より必要なものに重点が移されていくのです。大きく分けて二つあります。一つは本土決戦に何とか間に合わせようとした特殊兵器、く号兵器、電波を使った兵器です。それからロケットだとか、あるいは、ね号兵器と言われる爆弾が熱源に向けて自動的に落ちていく装置。これは今では赤外線誘導ミサイルとして実用化されている技術です。例えば船だとか戦車だとか、エンジンを積んでいるものが発している熱をめぐらして爆弾が自動的に誘導されていくという技術、この開発を最後の最後までやっています。このような本土決戦に期待されていた特殊兵器の開発というのが一つ。それから、本土決戦の時には遊撃戦、つまり上陸してきた米軍を混乱させるための破壊工作、ゲリラ戦、これらが想定されていて、そのためのいろいろな兵器作りです。これは正規軍が持っている兵器に比べると、変わったちやちな兵器が多いのですが、民間人を装って米軍がいるところに紛れこんで放火をするといった目的をもった道具や兵器がこの時期の登戸研究所では開発され、また量産されます。

今日は、まず1945年の戦況を見た上で本土決戦準備がどんなかたちで行われていたのかということ扱います。そして、登戸研究所における風船爆弾作戦、それから移転後の重点研究や兵器生産についてです。今回この企画展にあたって長野に行き、いろいろと調べて参りましたので最新の調査報告をさせていただきます。

最初にこの生田キャンパスの戦争遺跡について触れておきます。1947（昭和22）年にGHQが撮影した航空写真に写っている建物は全て登戸研究所の建物で、100棟以上ありました。最盛期には1000人ぐらいの人が働いていた非常に大規模な研究所です。これだけたくさんの建物があったのですが、現在資料館になっている1棟だけが当時のまま残っています。あとは建て替えられました。このキャンパス内には動物慰霊碑、弥心神社、消火栓といった当時を偲ぶ物がいくつか残っています。資料館そのものも登戸研究所時代の遺跡といってよく、中は展示室になっています。もう一つ明治大学がらみで言いますと、中野キャンパスというのが現在JR中野駅の北口、中野サンプラザに近い所にあるのですが、当時は陸軍中野学校の敷地でした。日本陸軍の秘密戦のためのモノづくりをやっていたのが登戸研究所、それが現在明治大学の生田キャンパス、農学部・理工学部のキャンパスです。一方、秘密戦のためのヒトづくりをやっ

ていた陸軍中野学校は、現在明治大学の中野キャンパス、国際日本学部と総合数理学部という二つの学部がそこを使っています。現在の明治大学中野キャンパス、帝京平成大学、早稲田大学の留学生会館、東京警察病院、当時はこのあたりが全部中野学校ですから随分広いです。もっともこの生田キャンパスも同じです。現在、明治大学の生田キャンパスは5万坪ぐらいあるのですが、登戸研究所は11万坪ありましたから生田キャンパスよりももっと広いです。こちら〔中野学校〕も同じです。現在この3つの大学キャンパスが入っていて、しかも病院まであるのです。残念ながら中野学校の跡を偲ぶものは一切残っていません。東京警察病院の中に1mもないぐらいの石碑が立っていて、「陸軍中野学校趾」と書いてあるのですが、他には何も彫り込まれていません。いつ、誰が立てたのかもわかりません。これを見つけるのも結構大変で、意識して探さないと見落としてしまう。どちらかというが目立たないように、おそらく中野学校関係者が人目を忍んで立てた石碑であろうと思います。

I 1945（昭和20）年における戦況と〈本土決戦〉準備

1 戦況の悪化と戦力の消耗

1945年3月にはアメリカ軍がフィリピンの主要なところを制圧してしまいます。日本軍はマニラを失って、どんどん山岳部に退却するという状況です。ビルマでもイギリス軍が主要な所を制圧して、非常に厳しい状況になります。3月には東京大空襲をはじめとして、日本本土の大きな都市は軒並み大空襲を受けます。3月26日からは沖縄戦が始まります。慶良間諸島に米軍が上陸し、4月1日に沖縄本島に米軍が上陸しています。4月7日には戦艦大和が沖縄に特攻、そして航空特攻作戦が4月から5月にかけてピークを迎えます。4月には一日に200機以上飛び立った日もあるぐらい大変な数の特攻機が飛び立ちました。沖縄の近海でこれらの特攻作戦が行なわれました。そして沖縄戦が始まった直後に日本では内閣が変わります。小磯国昭内閣から鈴木貫太郎内閣、終戦内閣に変わります。しかしすぐに戦争が終わったわけではありません。戦況がどんどん悪化していく一方で、5月にはついにドイツが降伏します。ちょうど5月1日に日本の大本営にヒットラーが死んだという情報が入ってきます。同じ日になんとムッソリーニも殺されたという情報が届いて、かつて三国同盟を結んだ盟友はすべて潰えたことが明らかになりました。そして、5月上旬には沖縄戦の戦況も極めて厳しい状況になります。5月4日を期して、要するに翌日5月5日、端午の節句の日に勝利をあげようと、沖縄本島で日本軍は反撃を始めますが失敗してしまうのです。実は5月上旬に、天皇も無条件降伏やむなしという気持ちになります。これは側近であった木戸幸一内大臣という人が海軍の中で終戦工作を進めていた高木惣吉少将という人にそのことを語っています。つまり5月上旬までは本土決戦もありうると天皇自身も考えていた。しかし、その沖縄戦で調子が悪い、ドイツも降伏し、

もうどうしようもないなということで天皇の気持ちも変わった。ところが、この後まだ6月・7月・8月と戦争は続くわけです。なぜ天皇の気持ちが無条件降伏やむなしになったにもかかわらず戦争が続いたのかというと、天皇も含めて日本の国家指導者たちが、ソ連を仲介にした和平工作にこだわってしまったからです。また、ヨーロッパで戦争が終わったのでイギリス・アメリカ陣営とソ連が対立を始めるだろう、と陸軍の一部は観測していました。これは本土決戦派です。戦争をまだ続けたいという人たちも、この際日本はソ連側にシフトして戦争を継続しようじゃないか、その内にソ連対英米という新たな戦争がヨーロッパで始まるだろうから、それに日本もうまく乗れば無条件降伏は避けられるのではないか、という考え方です。ですから戦争続けたいという人も戦争やめようという人も、みんなソ連を仲介とした和平工作というのに乗りました。結果から言うと大失敗でした。つまりソ連はこの年2月のヤルタ会談で対日参戦を決めています。イギリスやアメリカに対してソ連は8月15日を期して参戦し、日本に対して攻撃することを約束していました。実際には1週間早くなって8月8日になりました。なぜかというとアメリカが原爆を落とすからです。アメリカが日本に原爆を落とすならすぐに日本が降伏してしまうと考えたソ連は参戦を1週間早めて、8日に日本に宣戦布告をするのです。アメリカはアメリカで、ソ連がどんどん侵攻してくるとややこしいことになるので、2発目の原子爆弾を8月9日に落として早く日本を降伏に追いこもうとする。このような状況が8月には展開するわけです。

2 本土決戦準備の本格化

本土決戦準備はいつから始まったのかというと、レイテ決戦、これはフィリピンで行われていた決戦ですが、1944（昭和19）年10月から始まりました。しかし、12月の下旬になって大本営はレイテ決戦方針を放棄、断念します。次はどこだとなると、沖縄ではなく本土決戦なのです。ですから1945年1月になると、大慌てで本土決戦準備が始まります。1月20日に「帝国陸海軍作戦計画大綱」が作られて、そこに「皇土（天皇が治める土地）、特に本土及び朝鮮」の作戦準備を本年初秋までに概成し、本土決戦を一応秋だと想定して、相手が上陸してくるのがおそらく秋ぐらいになるだろうと日本側も予想しました。米軍も実際に10月・11月ごろに、まず南部九州に上陸、そして翌1946（昭和21）年の3月から4月にかけて関東地方に上陸する、だいたいこういう構想を立てているのですが、日本側もそのぐらいだろうと予想して本土決戦準備を進めていくわけです。そして、大本営陸軍部は「国土築城実施要綱」というのを3月に発令して、1945年7月までに全陣地の骨格を完成せよ、そして10月までにこの本土決戦用陣地を完成せよと命じます。4月になると、まさに沖縄戦が始まった直後ですが、本土決戦は「決号作戦」と名前が付き、4月8日「決号作戦準備要綱」、つまり本土決戦を想定した命令が出ます。そして敗戦時、陸軍は内地・朝鮮に300万近い兵力を展開します。しかし、その半分は

1945年になって急遽編成された部隊で、根こそぎ動員をして約150万人を徴集する、あるいは軍隊にいた経験のある人をもう一回召集し部隊を編成するといった、かなりの泥縄ですけれども部隊編成が行なわれました。

もともと本土決戦準備は「内陸防御」という考えに基づいていました。内陸部に立て籠って長期に亘って抵抗するという考え方ですから、長野県の松代に大本営を移して内陸に相手を呼び込んで戦う。この内陸防御という考え方は硫黄島で成功したやり方、成功と言っても硫黄島は陥落するわけですけれども、長期にわたって抵抗する内陸防御という考え方で硫黄島や沖縄戦は基本的に行なわれました。これに対する言葉は、「水際防御」という海岸線で防御するやり方です。これはサイパン島で大失敗をしました。水際で米軍を食い止めようとして海岸線に部隊を配置したところ艦砲射撃と空爆であつという間にやられてしまうのです。ですから、水際防御は難しいという考え方で、段々日本軍は一旦米軍を上陸させておきそれから反撃をする。内陸に引き込んで反撃すると、米軍と日本軍が混在状態になりますから、米軍得意の艦砲射撃と空爆が十分に活かさないのです。ところが、内陸防御をとって内陸から移動する間に、大きな損害を蒙るのではないかという心配が段々出てくるのです。この内陸防御という考え方に基づいて、埼玉県や神奈川県でも作戦道路、戦車なんかが走れる道路がどんどん作られます。例えば国道16号線は大体その頃整備されたのです。埼玉でもそうです。そういう作戦用の戦車なんかを通れる立派な道路をたくさん住民を大動員して造るのです。しかし、それが出来上がってみると別の心配が起きてきます。つまり、立派な道路を造ったけれど、結局米軍が利用するだけではないだろうかという心配が段々強くなってきて、埼玉なんかでは造った道路を壊しています。そういう無駄なことをやったのです。実は沖縄でも、伊江島という所に立派な飛行場を造ったのですが、結局米軍が使うだけだということでまた住民を大動員して、立派にできた飛行場に穴を掘って破壊しました。だんだん米軍のために道路を造っているような感じになってきたものですから、内陸防御ではなくなるべく移動距離を少なくしようということで、もともと駄目だと言われていた水際防御に近い態勢にまた戻ります。例えば千葉県とか神奈川県なるべく海岸線に近い所に部隊を貼り付けて、もしそれが突破されてしまったら、本土決戦用に長野・群馬辺りに決戦部隊を立て籠らせる。だが、その中間地帯はどうするのか。つまり水際に貼り付いていた部隊が突破された、しかし内陸の決戦部隊までは距離がある。その中間地帯は、秘密戦つまりゲリラ戦で抵抗するという考え方、まさにここは中野学校と登戸研究所の出番だ、ということになるわけです。

総司令部（大本営）は長野県の松代、長野県のかなり北の方に置かれます。なぜ松代が選ばれたのかというと、松代周辺の山の岩盤が非常に強固であるということが決め手になりました。非常に岩盤が強固だというのは、軍人にとっては良いかもしれませんが、穴を掘る人にとっては大変なことです。その強固な岩盤を削り貫いていかなければならないですから、大変な難工

事になるわけです。

また、地理的に松代というのは、例えば太平洋側に米軍が上陸した時に、一番距離があります。なるべく時間が稼げるという考え方がありました。6月に義勇兵役法というのが公布されて「国民義勇隊」「国民義勇戦闘隊」が組織されることになりました。この国民義勇隊は一応組織されるのですが、先程の土木工事、そういう工事に動員されたことがほとんどで、実際に本土決戦が起ったとすると、国民義勇戦闘隊という組織になって、軍隊の補助業務、弾薬を運んだりとか、若い人たちは偵察部隊になったりだとか、沖縄戦で、学徒隊もしくはひめゆり部隊というような若い人たちが戦争に動員されましたけれども、同じようなことが本土でもおこった可能性があります。

国民義勇隊というのは性別にかかわらず、男性だけではなくて女性も含めて義勇兵役法という法律を作って軍隊の中に編成するというものです。最終的に軍隊の中に女性を入れるということにはなりませんでしたが、土木工事なんかには相当動員されています。

3 本土決戦準備の実態

本土決戦準備の実態ですが、特攻兵器の生産と出撃基地の建設が大規模に行なわれます。例えば「震洋」,「震洋」というのは特攻用のモーターボートです。「回天」,これは人間魚雷です。「伏龍」,「伏龍」というのはアクアラングを付けた生身の人間が、棒の先に爆薬を付けて海に潜って上陸用舟艇を海の中から衝くという、人間機雷と言われたものです。さすがに実戦では使われませんでした。訓練の途中でアクアラングの故障で、少なくとも10名、証言記録によっては50名近くの方が亡くなっています。神奈川県海岸地帯、例えばサーフィンでも有名な稲村ヶ崎も、「伏龍」の基地がありました。アクアラングを付けた人が海に入るための場所がちゃんと設置されていたのです。そういう準備が行なわれました。

先ほど話しました作戦用の道路や飛行場の建設が進みます。関東地区では「富士り号演習」という名前で道路の構築が大規模に行なわれます。しかし、後に大規模にまたそれを破壊するという作業が行なわれました。沿岸部では陣地の構築、あるいはレーダーの設置などが行なわれます。軍司令部機能や軍需工場は内陸部に移転します。特に長野県や群馬県、その山間部に軍需工場、トンネル工場が作られます。トンネル工場は一見、攻撃に強い感じがしますが、トンネルというのは大体水が出ます。そんなところに工作機械を入れようものならみんな錆付いて、なかなか再稼働できません。航空機の部品工場などは随分山間部のトンネル工場に移転するのですが、再稼働して生産再開とまではなかなか行き着きません。

陸軍登戸研究所などの秘密戦研究部門、中野学校などの秘密戦実施部門をこの長野県、群馬県に移転します。登戸研究所は長野県に移転しますし、中野学校の本部は群馬県の、製糸場である有名な富岡に移転します。それから中野学校は遊撃戦のための分校ができます。これが静岡県

の二俣という天竜川に沿ったところで、ずっとのぼって行くと長野県の伊那地方に行けるんですね。

Ⅱ 〈秘密戦〉における登戸研究所と中野学校の役割

1 〈秘密戦〉とは何か

登戸研究所や中野学校はまさに秘密戦のための研究組織で、秘密戦という言葉を手軽に説明しますと、戦争には必ず付随しますが、歴史に記録されないという特徴があります。ですから秘密戦やスパイ活動などで戦果があっても全く記録されないため、戦果があったのかなかったのかを含めてわからないというのが実状です。裏側の戦争です。それから、戦時に限らず、平時においても密かに行われている水面下の戦争のことで、現在では情報戦、という言い方で語られる場合もあります。情報戦というのは戦争になって急に始まるのではなくて、戦争が始まる前から当然スパイ活動をやっているわけです。そういう意味では水面下の戦争、表面に現れない戦争です。秘密戦というのは4つの要素から成り立っています。防諜、スパイの防止です。諜報、スパイ活動そのものです。謀略、破壊活動だとか相手（敵）を混乱させるようなことをひっくり返すものです。宣伝、相手（敵）を惑わすための宣伝です。この4つの要素から秘密戦は成り立っています。登戸研究所もこの諜報・謀略、こういうところに重点を置いているいろいろなものを開発しました。

2 陸軍登戸研究所：日本陸軍における〈秘密戦〉兵器・資材の専門開発機関

もともと登戸研究所というのは、新宿百人町という今でいうと新大久保に近いところにあった陸軍科学研究所の中に秘密戦資材研究室というのが1927（昭和2）年にできたのがその源です。これが篠田研究室で、篠田とは登戸研究所の所長になった篠田鐮のことです。1937（昭和12）年になって陸軍科学研究所登戸実験場というのができます。ここからが通常登戸研究所と言われているものです。1939（昭和14）年に陸軍科学研究所登戸出張所という名前になります。実験場から出張所でありあまり変わってないように見えますが、中身は随分変わりました。もともと電波兵器の実験場であったのが、電波兵器だけではなく、毒物・薬物、生物兵器、スパイ用器具、それから偽札、これらのものも併せて〔扱うようになったのは〕日中戦争の泥沼化が原因です。日中戦争というのは日本と中国との戦争ですが、裏側では対英米戦争です。なぜかと言うと、援蔣ルートとありますが、イギリス・アメリカが中国を支援していろんな物資を送る、それをなんとか阻止しようというのが日本側の考えです。しかし、イギリス・アメリカを直接攻撃はできませんので、秘密の手段、秘密戦によってそれを妨害する、あるいは情報を得るといったものです。ですから日中戦争は日本と中国との戦争ですが間接的にイギリス・アメリカと

の戦争が秘密戦という部門では始まっているものです。そのためにスパイ用品を作れということになりますし、中国の経済を混乱させるということで偽札が作られるわけです。このあと1942（昭和17）年に第九陸軍技術研究所という名前になります。これでわかりますように、実は登戸研究所というのは一度も「登戸研究所」という名前になったことはないのです。これは秘匿名称、秘密の名前です。登戸研究所とか中野学校と言っている分にはなんの学校か研究所かわからない、そういう通称を秘匿名称と言います。そして1945年4月を期して本土決戦に備えて登戸研究所は長野県の伊那地方などに移転をします。「など」としましたのは一部関西にも移転しているからで、秘密戦の拠点を関西にも置いておこうということで分散して疎開をしました。

3 陸軍中野学校：日本陸軍における〈秘密戦〉要員の専門育成機関

中野学校は日中戦争が始まった翌年1938（昭和13）年に後方勤務要員養成所という名前でききます。これが中野学校の前身です。1939年に中野の旧電信隊跡に移転してここからずっと中野に組織が置かれます。陸軍中野学校というのは秘匿名称ではなく正式名称です。1944（昭和19）年、太平洋戦争の最中に静岡県磐田郡に二俣分校、これはゲリラ戦、秘密戦のための人材を養成するための組織を作ります。1945年4月に本土決戦に備えて群馬県の富岡町に移転をします。この中野学校は前身から入れますと、2000人以上が卒業し、300人くらいが戦死しています。残置工作員のような形でいろんなところに派遣されて、生死不明のまま外国でずっと生活をしていた人たちも結構いました。小野田〔寛郎〕さんなんかがそうです。小野田さんはおそらく二俣分校を出たのではないかと思います、そういう活動をしていた人たちは戦後も全く生死不明の人たちがたくさんおられるわけです。中野学校だけではなく、秘密戦というのは主に憲兵の仕事でした。資料館の第3展示室に展示していますが、『秘密戦関係』というテキストが憲兵学校で使われていました。

Ⅲ 〈本土決戦〉準備と登戸研究所

1 沖縄における〈秘密戦〉

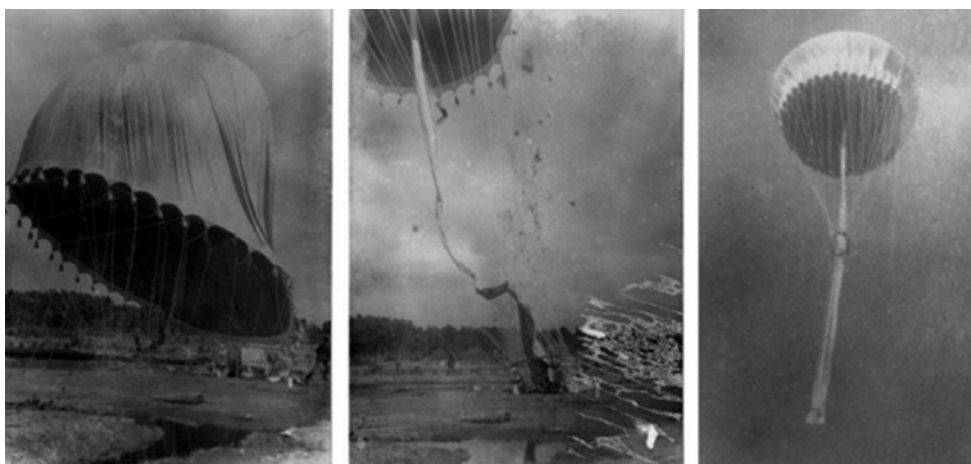
秘密戦は沖縄戦においても行われ、沖縄本島の北部、山岳地帯に派遣されていた独立混成第44旅団の第2歩兵隊（宇土部隊あるいは国頭支隊）が、秘密戦、遊撃戦を展開したと言われています。けれども、沖縄の人にとっては非常に評判が悪いです。この秘密戦をやっていた部隊はしばしば住民をスパイ扱いして住民を襲ったりしたからです。要するに、米軍占領地の人は米軍に毛布や食料などをもらったりするわけです。ところがそれを日本軍のゲリラ部隊が出てきて奪ったり、あるいは米軍に通じているということで住民を攻撃することが実際起きてしま

うのです。^{おおきみそんとのきや}大宜味村渡野喜屋というところでは宇土部隊の兵士が一般住民に手榴弾を投げて二十人近い人が亡くなるという事件も起きています。

本土決戦準備はなかなか進まなかったのですが、例外的に進展した部門が松代大本営の建設工事です。これは1944（昭和19）年の11月11日、1並びの日に、たぶん縁起担ぎですが、工事が始まりました。これは大変な資材と労働力を投入して、敗戦時にほぼ完成をしています。現在でもこれは見学できます。それから本土決戦を側面から支える作戦として、登戸研究所が開発した風船爆弾が実戦に投入されます。実は風船爆弾は兵器としては決定的な欠陥があります。なぜかという、まず季節限定。偏西風が強くないと使えない。春から夏、秋口にかけてはまだ使えず、11月から翌年3月・4月ぐらいまででないと使えないという点。それから、風任せでどこに落ちるかはわからない。ですから命中精度という点では極めて低いです。兵器の歴史を見ますと、破壊力を強めるか、命中精度を高めるか、この二つの方向で兵器は発展していくのですが、風船爆弾の命中精度はそもそも悪いわけで、目標が北米大陸という大きなターゲットでないと使えない。一方で破壊力を強められるかという、10メートルの気球に吊るせる爆弾の重さは30キロぐらいに限定されてしまう、となると大きな爆弾は吊れないのです。ですから当初考えたのは生物兵器、細菌兵器を積んでの攻撃です。ポツンポツンと風船爆弾が落ちたとしても細菌がどんどん広がっていってくれば命中精度の低さと破壊力の小ささを補うことができる。ということで、もともとは細菌兵器等を積む予定でした。ところが、ものごとは思った通りに進まないんですね。最初は731部隊が開発したペスト菌を積もうとしますが、風船爆弾は上空1万メートルを飛んでいきます。零下50度という環境、となると、ペスト菌が凍え死んでしまう。で、これは使えないということになり、牛疫ウイルスという牛を殺すウイルス。これはいったん凍ってもまた元に戻ると復活するので、これはいいぞということで、この開発をします。けれども結局、この手の兵器をアメリカに使用するとアメリカは日本に対して同じように生物兵器あるいは化学兵器で報復する虞がある、ということでやめたのです。国際条約（1925年ジュネーブ議定書）上、先制使用が禁止されているのです。ですからアメリカに対し先にこの手の兵器を使うのはやめておこうということになり、結局ふつうの爆弾やふつうの焼夷弾を風船爆弾に吊って飛ばします。ですから破壊力は小さいままです。当初の謳い文句は決戦兵器だったのですが、実際にはそれほどの破壊力はありませんので、後方攪乱のための謀略兵器と位置付けられるかと思えます。風船爆弾は非常に大きなもので、和紙でできています。ふ号兵器というのが正式な名前ですが、アメリカ本国に対する謀略兵器で、大げさな言い方をすると初めての大陸間横断兵器です。ただし、季節限定、ピンポイント攻撃も不可能です。直径10メートル、下に積んでいるのは、全部が爆弾ではなく、ほとんどが高度維持装置という装置とバラスト（おもりの砂袋）です。風船爆弾は夜になると、中の水素ガスが収縮して落ちてしまうので、夜になって高度が下ると気圧計（高度計）でそれを感知して積んでいるバラス

ト、砂袋を自動的に落として高度を回復するという仕組みです。実際、100キロ以上砂のおもりを積まなければならないわけですから、積める兵器の重さがどんどん少なくなる、こういう特徴です。ただ、このバラストを積まないで太平洋横断ができないわけです。

風船爆弾は実際に1944（昭和19）年11月に700個、12月に1,200個、1945年1月に2,000個、2月に2,500個、3月にも2,500個、4月に400個、合計9,300個がアメリカに向けて飛ばされました。ハッキリとアメリカでの着弾地がわかっているのが361個、あと着弾地はハッキリしないけれども到達しているであろうというアメリカ側の推定を含めると少なくとも1,000個とされています。もっとも日本側が計画したのはもっと多く、1万5,000個を飛ばそうとしましたが、風船爆弾の製造がここまで間に合いません。1万個できるかどうかというところです。これは球皮生産、つまり和紙の生産とこんにゃくの生産に規定されるので、造りたいだけは造れなかったんです。しかし、1945年になってからが風船爆弾のピークであるということがわかります。計画上も1月2月までに一番たくさん飛ばそうとしていましたし、実際には2月3月に最もたくさん、ひと月あたり2,500個を飛ばしています。アメリカ側の対応・反応ですが、気球そのものを捕獲しているのだから、直ちに構造を解明します。現在でも風船爆弾の現物は日本に一つもないのですが、アメリカやカナダには本物があります。当時捕獲したものがアメリカやカナダの軍事博物館には残っています。最終的には、千葉県・茨城県・福島県の3箇所の放球基地も、バラストに積んでいる砂の分析から、アメリカ側はその場所を突き止めてきます。放球基地付近を空襲しています。アメリカ側も考えることは同じで、ふつうの小さな爆弾や焼夷弾を積んでくるのはどうもおかしい、生物兵器や毒ガスを積んでくるのではないかと疑っています。ただパニックを起こすのが日本側の狙いですから、アメリカ側も報道管制を敷いて報道させませんでした。そのために民間人が6人、オレゴン州で不時着した風船爆弾の焼夷弾の破裂で亡くなっています。風船爆弾のもう一つ困った点は、戦果が確認できないことです。誰も乗ってない無人の気球ですから、本当に戦果が上がっているかどうかというのは相手が発表してくれないとわからないという、困った状態です。ところが、資料館で見いただきますとわかりますが、1945年2月18日の朝日新聞が、中国の報道を転載するという形で、「死傷者500名」と報道しています。この時に初めて「風船爆弾」という名前が使われました。ですから私たち今でも、風船爆弾と言っているのは、この2月18日付の朝日新聞の報道で大々的に風船爆弾という名前が使われたためです。「あ、あれは風船爆弾というものなんだ」と製造にたずさわった人も気がついた。軍はこれを「ふ号装置」とか「ふ号兵器」と呼んでいましたので、一般に風船爆弾という名前はこれによって広まることとなります。ただし、死傷者500名というのは全くの誤報で、目撃者が500人というのが間違えて伝えられたようです。もともとアメリカからの情報がいったん中国に行って中国から日本に伝わってきたのです。間にいろんなものが入るとだんだん情報は不正確になっていくわけです。



【写真1・15m気球】

通常の風船爆弾よりももっと大きな直径15メートル気球というのを登戸研究所では試作しました。これなら夏場でも放つことができるのだそうです。何個か2月ごろに試作したのですが、結局これによる作戦は行なわないまま戦争は終わりました。打ち上げの様子が写真に残っていますが、ちょっと10メートル気球とは形状が異なっております。この第一科の科長、責任者であった草場季喜（陸軍少将）が戦後までこの写真をお持ちだったのですね。草場さんのご遺族が相模原にお住まいで、これらの資料をご寄贈いただきました。非常に珍しいものです。これは試作の15メートル気球の写真です。この写真は企画展で展示をしております。

2 決戦準備と〈秘密戦〉関係諸機関の疎開・移転

登戸研究所は疎開と同時に電波兵器関係は別のセクションに統合されました。多摩研という、別の研究所にレーダー部門は統合されます。本部・二科・四科、こういうスパイ兵器を開発している所は長野県の伊那郡、現在の駒ヶ根市を中心としたところに移転をします。それから電波兵器、く号兵器ですね。電波を使って飛行機を撃ち落とそうという電波兵器関係は、長野県の北安曇郡に移転します。どこにどういうものが移転したのかは詳しく企画展でご紹介しています。電波兵器などの研究部門は松代に近い北の方に、実際に物をつくっている工場関係は比較的南の方に置いています。これは恐らく南の方から戦場になるという事を想定したためだと思われます。要するに天竜川に沿って米軍が北上してくるということを想定したのかもしれませんが。ですから、その天竜川に沿って中野学校の二俣分校があり、この登戸研究所の工場があり、秘密戦関係がこの天竜川沿いにかなりまとまって作られています。

偽札製造工場は基本的にこの登戸（生田）に残るのですが、製紙部門、和紙を生産するという事で、福井県の武生、ここも、もともと和紙の産地ですので、そちらにも分工場を作っています。

中野学校は、教育の重点を遊撃戦、ゲリラ戦に変更して、この静岡県の中野に二俣分校を

開設して遊撃戦幹部の養成をしています。本部も1945年に富岡に疎開をします。

3 本土での〈秘密戦〉の準備

実際に本土での秘密戦準備ということで中野学校が中心となって「遊撃戦戦闘教令」という秘密戦・ゲリラ戦のためのマニュアルを作ります。敵中に潜入する、奇襲する、陽動作戦、それから謀略工作、後方攪乱などが主な目的で、薬物・細菌・時限爆弾・焼夷弾を使用して、正規軍戦ではありませんが、米軍が日本に上陸して基地を設定したらそこに忍び込んで混乱させる、というようなことを想定しています。それから、この中野学校と直接関わりはないのですが、実は1944（昭和19）年12月に天竜川下流の河川敷で毒ガスの雨下（飛行機から毒ガスを撒くこと）の実験をやっています。実際に日本陸軍の飛行機から、天竜川の河川敷を行軍する一個小隊めがけてイペリットガス、これはびらん性ガスですから大変な致死性のガスです、これを液状にして撒いて攻撃する。もちろん下で行軍している人たちは毒ガスマスクを持っています。最初からつけていると息苦しくて行軍できないので外して、合図があったらさっとマスクをつけるんです。それから皮膚に毒ガスがつくとただれてしまいますから、防護服を着て行軍しているのですが、この実験ではなんと、その小隊長だけがガスマスクを付け遅れて重傷を負うという事故が起きてしまいました（岡沢正「告白的『航空化学戦』始末記」,「丸」編集部編『告白的「航空化学戦」始末記』光人社NF文庫,2012年所収）。成功していたら何も書き残さなかったのですが、そこで重傷を負ったために、その小隊長が、戦後、こんな実験をやったということを書き残したので、まさに本土決戦では場合によっては毒ガス戦もありうると想定していた事実がわかりました。これはもちろん、米軍が毒ガスを使った時に備えての訓練だったということになっていますが、日本軍が撒いているわけですから、撒く実験でもあったわけで、どちらもあるということです。毒ガスはこのようにやっておりまして、更に、細菌戦もありうるということでした。これはまた後でお話します。

登戸研究所は、戦争末期に重点項目を定めて兵器の開発をしていました。まず、第一は「研う」、これ書き間違いではありません。「研う」という兵器です。「う」というのはウロトロピンという薬品を主原料としていて自由自在に形を変えることができる粘土のような爆薬です。ですから、仕掛け爆弾、缶詰なんかに詰めて使うと言われていました。作った人の証言では、粘土というより、味噌のような、というような言い方をされる人が多いです。これを筒の中に詰めたりしたということです。この「研う」、何にでも充填できる粘土状、もうちょっとドロツとした感じのもののようなのですが、そういう爆薬を作りました。これは多くの方が作ったという証言、この伊那地方はそれを金属製の容器につめた、というような証言があります。それから焼夷剤。これは焼夷弾というよりは、手投げ弾式で火災を起こすもの、こういうものを特に伊那地方中沢地区において生産をしています。

それから、こういう簡便な兵器とは違うのが「マルケ」。○を書いて決戦の「ケ」を入れる、決戦兵器という意味ですね。これはまさに、開発が期待されていた兵器で、熱線、赤外線を発生している物に対して、爆弾が自動的にそこめがけて落ちていくものです。もともとは、当時、[熱線の頭文字をとって]「ね」号兵器という、赤外線を発生しているものに対して、銃口が向くような制御装置が開発されていたのです。それをもっと発展させて空中の爆弾が熱線めがけて落ちていくもの〔が「マルケ」〕。これは現在、赤外線誘導方式のミサイルとして実用化されている技術です。熱源に対して銃口を自動的に向ける装置（「ね」号兵器）も現在では実用化されています。以前に東シナ海における不審船事件があったときに、海上保安庁の巡視船がその不審船にめがけて機関銃を撃っている映像が公開されました。これまさに、ここでいう「ね」号兵器、つまり熱源に向けて自動的に機関銃が指向されるという仕組みを持った機関銃で撃っています。ですから、熱源、つまりエンジンをめがけて撃っている、自動的にそれができる装置です。現在では完全に実用化されているものですが、その開発を急いでいた。銃口を向ける、あるいは爆弾そのものが可変翼（動く翼）を持っていて、誘導されながら熱源に向けて落ちていく。これができれば特攻隊はいらなかったわけですね。けれども、まさにそれを人間が操作したのが特攻隊ということになってしまうというわけです。

あと「く号」兵器、これは登戸研究所でずっと研究していた怪力光線で、強力な電磁波を使って人員を殺傷する。実は静岡県島田で海軍も殺人光線という名前で作っていました。海軍の方がちょっと進んでいたような感じです。電磁波を使って飛行機を撃ち落とす、あるいは人員を殺傷する。登戸では実験動物を殺傷するところまではいっていましたが、強力な電力が必要なのでちょっと手軽に持ち歩ける兵器にならない。そこがネックで、それこそ発電所のそばでないと設置できない。海軍も天竜川のダム付近にこの種の兵器を配置しようと準備していました。結局、その直前で戦争は終わります。

それから細菌兵器。何の細菌兵器を使おうとしたかはわかりませんが、石井式濾水機用の大量の濾過筒を登戸研究所が伊那地区に搬入していました。戦後、伴繁雄さんという登戸研究所関係者の自宅に保管されていましたが、これはひょっとしたら細菌戦の準備だったのではないかと推定しています。



【写真2・放火用謀略兵器とおもわれるもの】

写真2は今回見つかった放火用謀略兵器と思われるものです。単なる長い筒状のものですが、筒状のこの中に穴が開いていて可燃性の物（着火剤）が入っています。火をつけるとボーッと20センチくらい火が噴き出ます。一見すると花火みたいですが、恐らく放火をする道具です。実はこれは中沢の工場から戦後、周辺にお住まいになった方が持って来たものです。そこで作っていた物を黙って持ち出したということだと思いますが、持って来て、この2本あるうち短い方の1本は火をつけてみたようです。火をつけたらボーッと火が出て、ちょうど蜂の巣を焼くのに都合が良くて何回かそれで蜂の巣を焼いたという証言があります。実際に焼いた人がお持ちだったので、それはまず確実だと思います。1本は全く使っていない、1本は何回か使って短くなったものです。これは完成するとどんな姿になるのかはよくわかりません。もともと傘に仕掛けた放火用の兵器というのがありますが、傘の柄の中に入れるようなものなのか、それともこれをぶつ切りにして、導火線のような役割をはたすような使い方をしたのか、はっきりとはわかりませんが、少なくともこれは伊那地方の中沢小学校、当時の国民学校を中心に登戸の工場ができるのですが、その近くの神社も工場になっていて、この兵器を作っていたそうです。今回私たちが調査に行った時に、この放火用謀略兵器をお持ちの方に会い、実際燃えた跡がはっきり残っていました。ちょっと危険な物ですから、火が点かないようにして展示しています。

本土決戦に際しては、登戸研究所というのは研究・開発・生産部門で、中野学校は人材養成部門なのですが、そんなことは言っていられなくなり、どんどんこの2つは融合していきます。登戸研究所は生産してすぐそれを使うと。実戦部隊とだんだん統合されていくような流れです。この本土決戦に際しては、秘密戦関係機関が地理的にも接近し、開発・製造・実戦がだんだん融合する体制になりつつあったのだというふうに見えます。登戸研究所が北安曇・伊那、中野学校が二俣・富岡と、いずれも松代を防衛する重要拠点に置かれていく。だから単に生産する、人材を養成するというだけでなく、いざとなれば実戦部隊に変わっていくということが想定されていたと思われます。ただ本土決戦関係の文書資料的なものは徹底的に焼却されたので、それを裏付ける証拠はありませんが、状況証拠からするとそう言えるのではないかと、思

います。

第5展示室で展示中の伴繁雄さんの自宅にあった石井式濾水機濾過筒、水を濾過するためのカートリッジです。実際に長野県は水が良いところですから、このようなカートリッジは必要ありません。もしこれを必要とするということになると、水が汚染されていることが前提です。どうして汚染されるかという、細菌戦です。細菌戦をやれば当然水が汚染され、これがないと日本軍も飲み水を確保することができません。全国どこを探してもこのように濾過筒が大量に発見された場所はなく、みんな破壊されています。なぜかと言うと、よく見ると、1本1本「軍事秘密」と刻印されていて、兵器と同じ扱いですから、戦後は完全に破壊されて残っていません。ところがなぜかここにはそれが大量に残されています。大量に持ち込んだと同時に戦後も密かにずっと置かれていたということです。

おわりに

今年2015年は戦後70年ですけれども、戦争、特に秘密戦というのは証拠が残らないものです。特殊な分野ではありますが、やはり秘密戦には戦争の本質を示すところがあります。手段を選ばないということになっていきますし、非合法の部分というのも当然あるわけです。どんどん戦争体験者が減少していく今日、私たちがこの秘密戦も含めて意識的に、あるいは組織的にこの記憶を継承しないと、どんどん失われてしまうものです。そのために資料館もいろいろな工夫をしたいと思っていますし、調べれば調べるほど、本土決戦というのは幻ではなかったということがわかってきます。できたかどうかは別として一定の準備は進めていたことが明らかです。この明治大学は、偶然ではありますが、この秘密戦のためのモノづくりの拠点であった登戸研究所の跡地がこの生田キャンパスですし、ヒトづくりの拠点であった中野学校の跡地が中野キャンパスということですから、明治大学がきちんと残していけよ、という啓示なのだろうと考えています。戦争と技術、戦争と人材、戦争と倫理ということを考える非常に重要な素材です。資料館では、今この企画展の第一期をやっている、秘密戦というよりも登戸研究所に勤めていた方から寄贈されたあるいはお借りしたものも特別展示しております。登戸研究所に勤めていた職員さんが出征をした時に登戸研究所に勤めていた人が日の丸に寄せ書きをしているのです。この中には所長である篠田少将や第一科科长であった草場少将の寄せ書きも入っています。それからその御親戚がお持ちだった陸軍近衛砲兵の大礼服や、登戸研究所に勤めていた工員さんが付けていたバッジもあります。ちょっと分かりづらいかもしれませんが、これは現物を資料館で見たいのですが、これは、直径1センチくらいの、すごく小さなバッジで、登戸の「の」がデザインされています。秘密の機関ですから、はっきりと登戸研究所などを書いてしまうとやっばりまずいのでしょう、見る人が見れば分かるという、バッ

ジになっているのです。この現物は本当に珍しいです。これはお借りしているもののため9月26日までの展示になりますので、お早めにご覧頂ければと思います。こういうものも含めて今回展示をしています。

質疑応答

質問者1：どうもご講演ありがとうございました。いろんな施設が現状どうなっているかということを一、二お尋ねしたいです。登戸研の多摩陸軍技術研究所についてどうなったか。それから二番目の、長野県伊那地方に登戸研が疎開しているのか、それが現状どうなっているのか。更に、松代大本営跡が天皇・皇后・皇太子等の居住区、棟が作られたそうですが、それらがどうなっていたのか。最後の質問は、慶應大学のキャンパスが連合艦隊司令部に接收された時に、地下壕が作られましたが、あれも連合艦隊司令部が移転の方針、というより最初から防空壕、地下壕が作られたのか、それとも後になって作られたのか。それに絡んで、登戸研には爆撃されたらされると非常に困るというようなものがあったと思うので、地下壕が一切掘られなかったのか。以上です。

山田：はい、今のご質問にまとめてお話をさせていただきます。多摩研については、残っているものがほとんどないと思われま。陸軍の研究施設は中央線沿線にわりと集中していたのですが、戦後、いろいろな施設に使われて、一部、例えば一橋大学の中に残っている施設などがありますが、特にまとまったものが現在残っているとは思えません。伊那地方に移転した登戸研究所については、中沢国民学校、現在の駒ヶ根市立中沢小学校が、登戸研究所が使っていた当時の校舎を民俗資料館として今でも残しています。小学校を接收して工場にしたわけですが、それらが一部残っています。当時、神社なども工場にしたり、お寺を登戸研究所の本部にしましたが、それらは残っています。比較的この伊那地方は小学校だとかお寺だとか神社とかを使ったがためにわりと関連するものが残っていたり、戦後、きちんと撮影されたりしています。もちろん、どんどん取り壊されていたりしていますので、残っている物はどんどん減ってはきていますが、その中心地であった中沢小学校には、市の教育委員会が小さな資料館をつくり、当時使っていた物を一部展示していて、駒ヶ根市の施設として保存されています。それから、松代大本営にあった皇族の住居、天皇の御座所も含めたものは、現在、気象庁の施設となってそのまま使用されながら残されているので、松代は比較的ものが残っています。もちろん、周辺部分のいろんな施設はかなり壊されてしまっていますが、一番重要な仮皇居のような部分は現在でも見学することができます。それから日吉の地下壕については、連合艦隊の司令部がそこに移るということでトンネルを掘ったということです。もともと連合艦隊司令部は開戦時には戦艦長門に、そのあと戦艦大和や戦艦武蔵にありましたが、軍艦にある必要はないということ

で、結局陸に上がることになりました。そのためには通信設備と攻撃を受けた時の耐弾性といえますか、攻撃を受けた時の耐える力があればいいということで、日吉に地下壕を掘って、一応、大学のキャンパスをカモフラージュに使うわけです。その地下にトンネルを掘って連合艦隊司令部を移したと、こういうことです。この登戸には大規模な地下壕はありません。ただ小規模な防空壕だけはあります。登戸研究所はなぜか空襲、爆弾による攻撃は受けていません。ですから建物も破壊されておられません。ただ機銃掃射は受けていたようで、そのための防空壕と言いましょか、地下壕は斜面を利用して何ヶ所か掘ってあったみたいです。現在でもその跡は残っておりますが、大規模な地下壕があったということは聞いていません。以上です。

質問者2：旧陸軍登戸研究所というので登戸の駅の方かと思いました。そしたらこの生田の方で。昔はここら辺を登戸と言ったのですか。どういうことで登戸という名称になったのでしょうか。

山田：はい、この地が登戸という地名になったことは一度もありません。ここは戦前から生田です。登戸という地名はどこから来たのかと言うと、現在の向ヶ丘遊園駅あたりがもともとの登戸というところ。登戸郵便局も、登戸交差点もそこにあります。戦前において向ヶ丘遊園駅は稲田登戸駅という名前でした。そこから行く研究所という意味なんですね。ですから、そのものズバリの名前を付けてしまうよりは、ちょっとずれた名前を使っているということです。そういうのは、わりと軍事施設にはよくある話です。例えば厚木航空隊〔厚木飛行場〕というのは必ずしも厚木にない、というのは、そのような理由からです。ですから近い地名は付いているのですが、中野学校みたいにそのものズバリの地名がついている場合もありますけれども、やはり少しずらした地名、特に秘匿名称として使う場合にはそこから行くのだ、というだけで、この土地がそのものズバリ登戸であったわけではない、まさに地名としての登戸というところではないということです。秘匿するということからそういう名称が使われたのだらうと思われま。

質問者3：先ほど登戸は空襲を受けていないという話がありました。これはアメリカがここをそういうふう認識しなかったのか、あるいは意図的に空襲しなかったのでしょうか。それともう一点、実は私は伊那飛行場近くに居るんですけども、伊那地方も、私聞いたところでは空襲はないと思っているんです。が、先ほど話で天竜川を上りながら空襲の計画があった話があったので、出来たのが4月に入ってから、そこでもアメリカは当時そこに登戸研究所の移転先だという認識はなかったのでしょうか。米軍がなぜ空襲しなかったのかという点でちょっとお話しただければと思います。お願い致します。

山田：はい、これは非常に大きな問題で、私たちも不思議に思っています。当時の航空写真を

見ると非常に大規模な施設が並んでいて、これが空襲を免れたのは偶然とはどう考えても思えないです。しかも現在、南の方の農学部畑になっているところは、風船爆弾の打ち上げ実験場なので、風船爆弾関係の事をやっているということはある程度わかっています、わかった上で敢えて空襲しなかった場所ではないかと推定しています。その場所が何なのかわかっているけれども、占領した後に使おうとか、あるいは人材を一網打尽にしようとか、そういう理由で空襲していない場所というのは確かにあります。そういう点では実は米軍側の資料が明らかにならないと真相は分かりませんが、川崎〔南部〕は非常に激しく空襲されているわけですし、この近くでも空襲されている場所があります。しかし敢えて、大きな施設が空から見たら丸わかりであるにもかかわらず空襲されなかったのは、偶然というよりはアメリカ側に何らかの意図があってここをあえて残したというふうに思われます。そして実際に、多くの登戸関係者が米軍に戦後、非常に重用され、重要視されています。研究成果と引き換えに戦犯の免責が行なわれたということだけでなく、実際に技術を使って米軍で働く。毒物・薬物の専門家だった伴繁雄さんなどは、横須賀基地で働いていますし、偽札の責任者である山本憲蔵大佐はアメリカまで行って仕事をしています。もちろん後からの推定ですが、陸軍が対ソ戦、ソ連の情報をかなり持っていたということもあるのだと思いますが、ひょっとしたら米軍は貴重な人材確保ということを意図していたかもしれないです。戦後そういう人たちを非常に米軍が丁寧に扱い、待遇よく働かせているところを見ると、そういう部分もあったのかと推定しています。

質問者4：私は敗戦の年は、今で言う小学校、当時は国民学校の2年生でした。住んでいたところは岡山県の鳥取に近い山間部だったのですが、私が2年になったころ、学校が軍隊に接収されて、その軍隊が山の中にトンネルを掘っていたと思うんです。そこに、敗戦になったときにわかったのですが、たくさんの物資を貯蔵していたということがあります。当時、私は小さい歳でよくわかりませんが、そうこともやっぱり本土決戦に迫られてやっていたのではないかと最近になって思っています。そんなことが全国的にはどういう規模でやられていたのかということがわかりましたら教えていただきたいです。

山田：はい、今、ご指摘のように、本土決戦に備えて各所に物資の集積場所というのをつくっています。弾薬だけではなく食糧もです。これはほんとうに全国あらゆるところにつくって、戦後、隠匿物資として摘発されたり、軍の関係者が個人的にそれをどこかにもっていったり、そういういろんな事件があります。実は本土決戦期には、物が無い、とは言うものの、わりと早い時期から〔本土決戦の可能性を〕言われていたものですから、それなりに物資の集積が行なわれています。特にこれは九州の南部で最初に米軍が上陸してくるおそれがあったこともあり、宮崎県、熊本県の山間部にはかなりそういう物資の集積のトンネルの跡が現在でも多く発見されています。四国、それから中部地方、先ほどの天竜川周辺にも、やっぱりなにか想

定していた可能性があります。米軍の上陸を想定してすぐに対応できるように弾薬を集積するといったような場所があったんです。まだ全国レベルで全貌が明らかになっているということではありませんが、特に最近になって本土決戦遺跡というような言い方もされるようになり、特攻艇の基地であるとか、あるいは何に使ったかよくわからないけれども倉庫のようなトンネル、そういうものが結構発見されていて、また戦後それらが再利用されたりなんてことも結構あります。特に今年はかなり報道もあってそういう本土決戦関係の遺跡が随分新たに、今までそこに何かあるとわかっていても、何であるのかよくわからないもの、というのが結構あったのですが、そういうものがわかってきつつあります。この戦後70年ということのをきっかけにして、よくわからなかったことが、もう少しわかってくるのではないかと期待していますし、実際、調査はいろんな場所で進んでいくと思います。

質問者5：私が一番気になっているのが石井部隊のことにに関してなんですが、資料があまり無いようですが、もしかして先ほどの濾過装置は、進駐軍に対して、本土で実際に使おうとしたのではないのでしょうか。

山田：私たちもそのように推定しています。石井式濾水機過筒というのはまさに石井部隊、731部隊が軍隊用に作った濾水機で、要するに細菌に汚染されたような水も飲み水に変えることができます。それは当然そういう使い方もあるのですが、細菌戦を実施した場合には基本的にすべての水は汚染されますから濾水機・濾過筒がないと日本軍も困るということになります。あえて非常に水が良い長野県に大量の濾過筒を持ち込んだのは、水を汚染する、ということを考えないと濾過筒を大量に持ち込んだ理由というのがなかなか出てこないのです。ですから本土決戦に際しては場合によっては細菌戦も有りうる。さきほども言いましたように毒ガス戦を想定しているくらいですから細菌戦の想定があっても全然おかしくないわけです。それに備えて濾過筒を長野県にかなり持ち込んでいたのではないかと推定しています。これは文書史料で残らない記録ですが、物から推定してこのように考えた方がわかりやすいと考えます。本土決戦に際しては場合によっては日本側の細菌戦も一つの選択肢として考えていた可能性があるのではないかと、ということです。

それでは、これで記念講演会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

〔終〕

〔追記〕

本稿は、2015年8月22日(土)に明治大学生田キャンパス第二校舎2号館2001番教室にて開催された第6回企画展記念第一回講演会「NOBORITO 1945 ―8月15日までの登戸研究所―」の書き起こしに加筆・修正したものです。